

---

# 神様の石

境康隆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様の石

### 【コード】

N32960

### 【作者名】

境康隆

### 【あらすじ】

祠に祀られているのは神様の石。ただの石ころのそれに、男は納得できない

男は神様を信じない。それが神様を恭しく奉り、男に厳しくあたる父と祖父に対する単なる反発だとしても、男はそれを誇りにしている。

父は何かと、神様は見ているぞ。罰当たりめ。神様に恥ずかしくないのか。と、男を叱る際に神の威厳を持ち出す。

そして最後には庭に設けられた小さな祠に、男を小突いて、蹴飛ばして、引っ張っていくのだ。

もちろん神様に謝る為だ。父に逆らっても。母を困らせても。家をかき乱しても。ご近所に迷惑になっても。最後に謝るのは神様だ。

男は小さい頃、泣きながら神様に謝った。そこに収められているご神体の石に向かって謝った。

「神様。ごめんなさい、もうしません」

男はその一言を言う為に、しゃくり上げ、喉を詰まらし、泣きながら、苦勞して声を出したものだ。た。

少し大きくなっても、男は悪戯ばかりしていた。

「神様。ごめんなさい、もうしません」

男はその一言を、その頃には泣かずに言えるようになった。心底反省してその言葉が喉を通るようになった訳ではない。生意気にも謝ればいいんだろうと口だけ言うようになったのだ。

父はそれを見抜き、時に拳骨を食らわせたが、男は痛い以外はどうということにはなかった。

聞けば父も祖父から似たようなしつけを受けたらしい。悪さをしては、最後は神様に謝られさせられたとのことだ。

男は神様が嫌いだ。何をしてくれる訳でもないのに、最後はふんぞり返って男の謝罪を聞くだけなのだ。

父も祖父も、小さな祠の中のこの小さな石を、ご神体としてたいそう敬う。

「神様。ごめんなさい、もうしません」

ある日また少し大きくなった男は、そう神様の石に謝罪し、内心舌を出していた。

この祠の石を、父も祖父もまるで神様そのものの様に崇めている。男はそんな父と祖父に意趣返しをしてやろうと、そつとその石をすり替えたのだ。

祠の石はただの石だった。

そして今や、本当にそこらに転がっていた普通の石ころに変わっていた。

それを知らず、父も祖父もまだ神様として、その石を拝んでいる。滑稽だ。男はそう思う。ただの石を神様扱いして、何かご利益などあるものか。男は内心ほくそ笑む。

父と祖父は、石がすり替えられたとも知らずに、神様の石に今日も祈りを捧げていた。

そんな男の祖父も天寿を全うした。最後まで男がすり替えた石を、神様の石だと思って死んでいったのだろう。

そう考えると男は少し良心が傷んだ。

男も子供を持つ親になっていた。今は父がこの子の祖父だ。

血は争えないのか、男も子供の教育には手を焼いた。子供は男のいうことを全く聞かない。

父に逆らい、母を困らせ、家をかき乱し、近所に迷惑をかけても、けるつとしてしている。

男は仕方なく、神様の力を借りることにする。別段不思議な力を借りたい訳ではない。威厳を借りようと思ったのだ。

「神様。ごめんなさい、もうしません」

神罰の恐怖はてきめんなのか、子供は泣きじゃくりながら庭の祠の前で謝る。

そんなに怯えなくともいいのにと、男は内心想う。本物の神様の石は男の手によって、どこか庭のそこら辺に転がっているからだ。

今祠にあるのは、普通の石だ。神罰などあるはずがない。

「神様。ごめんなさい、もうしません」

神様が本当にいるのなら、男がそう言いたい気分だった。石を放り投げていなければ、男の子供に神罰で教育してくれたかもしれないからだ。

だが神罰などないことは、石を放り投げた男が一番よく知っている。それだけの不敬を働いて、男はのうのうと生きているからだ。

男の父の天命が尽きる時がきた。

父は男を枕元に呼び寄せる。

神様の石な。父は男に唐突に語り出す。

あれは小さい頃にな。小さい頃とは父の小さい頃だ。

神様の罰がどうのと、うるさい父に反発して。このうるさい父は男の祖父だ。

どっかそこら辺の石と取り替えてやったんだ。父はそう告白する。

だから、あの祠の石はただの石だ。父はとても嬉しそうだ。

そうかい。男は心底笑って応える。

俺も小さい頃やったよ。男はやはり笑って応える。

そうか、実はお前の祖父もやったらしい。父は笑って死んでいった。

父の葬儀が終わり、家が日常を取り戻すと、また子供を叱りつける日々が始まった。

「神様。ごめんなさい、もうしません」

子供は泣きながら謝る。だが心底謝っているようには見えない。

男はさてはと思い、そっと祠を覗き込んだ。

その石は、男が小さい頃入れ替えた神様の石と、やはり違う石だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3296o/>

---

神様の石

2011年10月7日17時23分発行